

昭和二十四年七月二十三日
昭和五十二年八月十五日
發行(種郵便物認可)
第三種郵便物認可
(毎月一回・十五日發行)

(通第三三八号)

慈

光

第二十九卷

第八号

信仰談話会抄録……………近角常観……………(1)

次

63825

◎

近角常音先生御法話……………大字三右エ門……………(8)

庄左の御さん

静けさと・ほほえみと……………川畑愛義……………(15)

——故池山先生のこと——

目

念仏詩抄……………木村無相……………(18)

聖人の常の仰せ……………花田正夫……………(21)

信仰談話会抄録

近 角 常 観

これから夏季求道会中、毎夕談話会を開いて、皆さんの信仰上の御質問に応じようと思ひます。それで先ず今夕は口開きとして、私から信仰の要点をお話ししたいと思います。

つまり最も大切な事は、真宗の眞の字の意義であります。聖人の御ころでは、眞は即ち如来のおまことである。これは何人も一応思ひ浮かべる事ではあるが、その本当の味をあげることがなかなか困難である。

先ず世間で普通にまことある人と云えば、親切な人、かわらぬ人などの意に使うが、然しながら眞のまことと云うのは、こちらが如何に不実で向つても、その不実を怒らずに、不実にすればするだけ眞実にして下さることである。

然しここが非常に大切な点で、我々の悪のさは一通りでないから、なおもその方に対して不実をやめぬ、然るに先方では益々よくして下さい。この最後はどこで解決がつくかと云うと、こちらが如何にも不実なために遂に、向うが

ぬ。自分がこれ程の親切をして居るのに先方が受けてくれぬと云うはあまりにひどい、と遂には先方を恨むようになる、人は九十九までよくすることが出来ても、あと一つが辛抱することが出来ぬとなれば、初めから出来ぬと同様である。こうして自分はもう駄目だとなつてくれれば、こん度は人が九十九までよくしてくれても、結局自分みたような者には最後にあきれられるであらうと思つて信することが出来なくなる。しかるにそこを飽くまであきれずに見て下さる絶対の眞実に対しては、ただただ恐れ入りて頭が下がるのであります。

今日の講話の始めに出ました聖人の御悲歎懐の御文は聖人が一方に飽くまで御自身の罪深いことを御懺悔なさると共に、それをどうする、こうすると云うのでなしに、その罪深い身を飽くまで見捨て給わぬ仏の御眞実をおよるこびあせられたのであります。我々の悪しさがまださほどでもないと思つて居る人は、中途半に居るので、そういう人はたとい御慈悲と云うて居つても、その実、仏はまだ不要となつて居るのである。

失礼ながら、そういうところが頂けて居ると思つて居る人も、問いつめられて見れば動揺するのであります。実際問題になると空になつて分らぬ、そこでどうぞこれから御質問なさるについても、なるべく實際問題を提出して頂き

あきれたとなれば、その眞実は壊れてしまうのであるが、向うの眞実が絶対であれば、どれほど不実なものも遂には驚き入つて頭がさがる。仏の我々に向うて下さる御眞実はこの絶対の眞実であります。歎異抄にある通り、本願を信ぜんには他の善も要にあらざる念仏にまさる善なき故に、悪をも恐れなし、本願をさまたぐるほどの悪なき故に。心配するな、仏の慈悲の深きことは、如何なる悪も本願のさまたげをなすことは出来ぬのである、即ち仏の眞実は我々の如何なる不実にも打ち勝つて下さるのである、それほどの御眞実を聞かされてみれば我々はおのずから頭がさがつて有難いと喜ぶ、これが仏の眞実と我々の不実との関係であります。

しかし此処がなかなか味わにくい。一般に人はそれ程自分を悪い者と思つて居らぬ。されど私共はよく気をつけると実に悪い。先ず第一に人によくする、親切をつくす、色々やるが、最後にそれで満足するかと云うにそういかたい。幸いここに御出席下さつた渋谷氏は、先達で自転車に触れて怪我をせられ、其時は一時腹を立てられたけれど直ちにわが身のわるさに気づき御慈悲を喜ばれたという御本人であります。先ずその当時の様子をお話し下さい。

渋谷氏 私は今先生からお話しになりました通り、過日某所で自転車にうちあてられ、この通りの負傷をいたしました。その時先方がかえつて私の不注意を罵りましたので、私も非常に腹が立つて、つい二言三言口きたなく争いました。先方が私の怪我を見て大いに済まぬと思つたか、今度は恐縮して頭を下げてあやまりましたので、私も心が解け、傷は痛みましたが、もう少しも腹が立ちません。若し先方が私の起き上がるまでにあやまってくれたならあんなに腹も立たなかつたらうにも思ひ、一寸したことでかれこれ臍患や愚痴をおこす、私の実情を見せていただき、有難く喜んでおります。

某氏 雑行とはどういうことですか。

雑行とは、正行に対した名で、これは善導大師が、五行と名づけて、読誦、観察、礼拝、称名、讚歎をあげていられる。しかもまたこの五行の中、称名をもつて正定業とされ、其他を雑修と云われる。如来の本願は念仏の一行

であって、其他に、或は經を読み、仏を観察する等のことは悪い事ではないが、これらを自分が助かるためと思つてするのであれば、雑修となるのである。

この念仏一行ということが頗る意味の深い事であるが、この真意義を頂く人が稀である。現在ある地方では念仏の一行であると云うて、仏壇を飾るのも廃している流義もあるけれど、これでは形ばかりにとらわれた誤りである。聖人の念仏はこうした意味ではない。今すこしこれについて述べて見よう。

善導大師の觀經の散善義（さんぜんぎ）の釈文に「一心に専ら弥陀の名号を念じて、時節の久近を問わず、念じ念じて捨てざればこれを正定の業と名づく、彼の仏願に順ずるが故に」とあって、法然聖人が四十三歳の時入信せられたのは、不図この御文に出合されたがため、これから善導大師にひとえに帰依して念仏せられた。だから法然聖人はただ漫然と念仏せられたのではない、この念仏は彼の仏願に順ずるが故である。この時に聖人は直ちに本願に目を着けられた。凡そ浄土の三部經は昔から読まれながら、本願が生きて来たのはここに始まるのである。私が始終申すことであるが、それまでの念仏は親さがしの念仏であった。法然聖人の念仏は親を求め得たのちの念仏である。迷い子の耳に子を求めてやまぬ親の声がとどいて親を呼びか

戒持律も、其他すべての行が及び難いに依つて、阿弥陀如来が法蔵比丘にましました昔、平等の慈悲に催されて、これら一切の行を選び捨てて、称名の一行をもつてその本願とし給うたとある。如何なる行もなし得られぬ我々に、仏がみずから回向して下さる念仏である。

それ故自力と他力とは正反対である、即ち仏は我々のかかる罪深き有様をみそなわし、それでは駄目であると仰せられるならば仏と我々の関係は絶えてしまうのであるが、罪が深ければ深いだけ、一層可愛相であるとお見捨て下さらぬ御呼声が念仏である。

しかし、それなれば我々はその仰せに従つて一心一向に念仏するのとかいうのでは、それはただの従順である。一心一向とは決してこちらの誇りではなくて、我等の力が及ばぬがためである。丁度病人が危篤に陥つて、如何なる薬もその効がないという時に、最後にこの一服は、汝如き危篤の病人に飲ませるためにわざわざ造つたものじや、さあこの薬を飲めと云われたとき、それでは思召しに従い飲んで見ましようではない。こういう者を助けんと仰せを聞いて、ああ自分はどうしても助からぬ病人である、地獄は一定住家である、この私をなおもそのように遺瀦なく云うて下さるのであるかと氣づいて見れば、如何にもその御親切の深い処が有難いとなつて、最早なおるなおらぬには心

えずに等しい。法然聖人を念仏の元祖と云うのは、聖人の以前にも永觀律師その他に念仏者は多かつたが、念仏の真意義を説かれたのは法然聖人である。

但し法然聖人の直流である今日の浄土宗では、吾々は専ら念仏を称すべきである、これ即ち弥陀の本願に従うのであると説く。これは親の仰せに従順な善人であるに過ぎない。そこでまず法然聖人の選択集を見ねばならない。何故に仏が念仏一つを称えしめ給うのであるか。何故手織の着物一枚を与え給うたのであるか。念仏一つを称えしめ給うのは外のどんな修行も及び難い身であることをお見抜き下されたからである。手織の着物を与え給うたのは、我々がとても外の美しい着物を着てもすぐ駄目にしてしまう身であることを知り通して下されたからである。

今晚は青年の方々も多いようであるから特に申し上げますが、一休宗教とは何か、相対と絶対との一致である。さてその一致に至るのに二つの道がある、一つは相対を磨き上げて絶対に達するのでこれを自力という。即ち大奮発心をおこして、坐禅や戒律を行つてゆくのである。ところが念仏はどうかと云うに、念仏して一歩一歩進んで行くといふのであれば、矢張り坐禅や戒律と一様になつてしまふ。

今、なぜ念仏が下へ向かつたかと云うに、選択集にこれをくわしく述べてある。その要は、我々は造像起塔も、持

がからぬようになる、これは従順ではなく信頼である。教育上でもただ教師に服従して居たり、従順であるだけでは何にもならぬ、如何にも先生の親切が有難いとなつて始めてその効果があらわれる。故に一心一向ということは罪惡觀である。又信心為本（しんじんいほん）ということも始めてここに開かれるのである。そうして一旦このお慈悲を頂いた上は、さきに申したお經を読むのも、仏を観ずるのもすべてご報謝となり、他力の行となるのであります。

ついでながら、この専修と雑修ということが頗る興味ある問題であります。真宗の念仏者は、往々雑修をやれば仏のお氣にいらぬなどと申すのである。これを一方から云えば、如何に忠実であるかということが分かるのである。そもそも真宗で雑修を戒められたのは覚如上人に始まられたとき、目を瞋（いか）らして打ち棄てられたと伝えられ、又蓮如上人は善鸞上人のお寺の前を通るとき面をおいで見向きもされなかつたということである。

しかしながらただ雑修がいかぬだけでは誤が分らぬ弥陀一仏を頼んで諸仏を頼まぬといふのは、諸仏が悪いと云うのではない、つまりは未だ真実に我身が悪いと氣づかぬために間違うのである。それ故、一方では諸仏諸菩薩をおろそかにすべからずという教もある。ここに諸仏の法

と、弥陀法との分れが生ずる。今日の吾々は諸仏の教ではとても助からぬので、弥陀仏の救済があらわれて下さった。然し諸仏もみな一切衆生を助けたいは腹一杯でまします。それ故今弥陀の名号の絶対の救済が現われているのを、諸仏は口を極めて讃歎なされる。弥陀経和讃には

恆沙塵数の如来は、万行の少善さらいつつ

名号不思議の信心を、ひとしくひとえに勧めしむ

とあります。この見地から云えば弥陀は一切諸仏の本地本仏であって、諸仏は弥陀に代ってこの念仏をお勧め下さる方となるのである。例の平太郎の熊野参詣の一段もこの意味で明瞭となるのであります。前年、広島県高田郡の郡の書記で平素信仰を喜んでいた人が、明治天皇の御不例の時、土地の神社へ御平癒祈願に参拝すべしと命ぜられたがどうも自分の信仰と矛盾をしようしても訳がわからぬので、手次の坊さまに尋ねられた処が、其坊さまは、平太郎さんの真似をして行けばよいではないかと答えられた。然しそれではどうも承知が出来ず、ともかく其場は、二重橋へお見舞に行く積りになって参詣したと、後程私に話された事がありました。

私はこれに答えて、成程、平太郎の真似は結構だが、平太郎の熊野詣りは、世間普通の儀にならうという便宜主義ではない。特にあの時、聖人からねんごろに念仏のいわれ

ため、国民のために念仏を申し合せたまい候はば、めでたく候うべし」との御言葉がある。これは世のさかしまごとを恨みとせず、かえってそのさかしまごとの世に禍なかれと願えという、実に意味深重な御教化である。今あなたもこれらのことを深くお考えになった方がよからうとお話したら、大層喜ばれ、早速帰校の後、私の申しした通りな報告をされた由であります。

かの三教（仏、耶、神）の合同の時も、上述の立場から見て到底これを許すことは出来ませぬ。併しまた人生はこの仏力一つで必ず行く所までやらせて貰えるのであります。

すべて政治も、教育も、実業もそのままでは行きつまるが、一旦それを打ち破って後に、自分の様な不実な者を見捨て給わぬが有難いと云う立場からやらせて貰うと、おのずから真の政治、教育、実業が現われてくると思われま

某乙氏（教育家） 真宗の信者中には俗諦門について、なお多く誤った考を持つ人がある様に思われます。

俗諦門に誤った考を持つ人は、未だ真諦の信心が十分でないからであります。これらの人達の考には大体二通りあります。即ち悪い者を助け給うのだから悪うてもかまわ

をお聞かせ頂いて、ただ本地の誓約にまかせて、念仏しつつ参詣せよとお示しをうけた。即ち熊野へ参るのも阿弥陀仏に詣るのも、つまり同じことになると思召してある、と申しました。

なおこの意味の事が現代の問題に活用された例を申せばかつて大逆事件や南北朝問題の起った年、文部省で倫理の講習会を催し、色々道徳上の訓示があったのであるが、この時、福岡師範学校の教員の某氏も亦この会に出られて、此時の訓示を聞かれた処が、平素の自分の信仰上の立場から考えて、どうも得心出来ぬ事が多い。そこでこの人は極く真面目の方でしたから思いあまって一日愁然として、私を訪問せられ、右の次第を語り、今後この訓示通りにやらねばならぬとなれば、到底辞職するの外はないとお話でありました。そこで私は、いやそれは決して辞職するには及ばぬ。私の思う所を遠慮なく申せば、貴方は帰校してま

ず文部省の訓示をありのままに報告し、さてその後になって、然し自分の信仰の立場から、斯様々に考えると批評を加えられたらよからう。何も文部省を相手にするには及ばぬ。貴方が辞職をなさろうというお考えは分からぬではないが、それでは教育に忠実なものとは云えぬ。聖人の御時にも、関東の御弟子達が念仏のたがによって鎌倉の問注所へ呼び出された時、聖人から賜った御消息に「朝家の御ぬと云うのと、悪い者を助け給うのであるけれどもこの世の生活は成るだけよくせねばならぬ」といふ、この二つです。

これは古い問題でなく、今日青年の大切な問題である。吾々は悪くてもよいと云えばとてそれで安心することは出来ず、又よくせねばならぬと聞いても、実際よくすることが出来ぬ。さてどうしたらよいのだろうか。かつて或僧侶の方が、自分は僧であるから最も立派な行いをせねばならぬと考え、清い思想をもって猛進せられていたが、それがついに実行が出来ぬと知れて大煩悶せられた。そこで私はいかに出来ぬとなればお苦しいでしょう。

しかし仏は、我々の道心も起らず、父母孝養も出来ぬ、そのして見ようのない点を哀れみ下され、それが見捨てられぬと仰せ下さるのであると申した処、この一言でお慈悲に徹して下さい、大いに号泣して喜ばれました。

又我々は悪くてもよいというのでなく、飽くまで悪を避けて善につかねばならぬが、併し仏は我々のどうしても出来ぬことをお見抜き下されて、如何にも可愛相で見捨てられぬと遣瀨なくいうて下さるのである。福島県の某富豪の方が、平生極めて厳格に御息を教育せられたが、親心子知らずで、某所で流行的な華美な物品を求めて帰った、父は大いに怒り、こんな物は汝の持つべきものでない。将来

「竹林抄」に云く。

至誠心とは我等が虚仮雑毒の誠にあらず、心のうちに仏の眞実の本願をたのみ奉る心なり。我等が心は、たとい清心をおこせども水に画く絵の如し、しばらく善心おこれども煩惱の水流にひかれて濁りやすき心なり。然れども仏は罪惡の機を救わんという願をおこし給う故に。

次に深心とは仏の本願を聞けども堅固の信心も起らず、本願も疑わしきようにおぼゆる時は、これほど無信ならん者は、いかでか助けたまうべきと疑い起るなり。されども無信なるは凡夫のならないなり。仏は無信をもすてたまわずと思う心は深心なりと云うなり。

○ 大地をいかに洗うも泥はとれぬ

衣につきたる泥は洗えば落ちるが、大地をはたいて泥のないようにしようとしても、それはかなわぬ。元來土を以て建立した大地なれば、いくら洗うても土はつきる期なし。この身はもと煩惱をもつて成就したる身なれば、妄念はいつまでも止む時なし。

「さざ波や幾度水のそそげども、鴨といふ鳥の足の黒



の戒めじや、遠くても其町まで歩いて行き、元の店へ返して来い、汽車賃はやれぬと、握り飯を持たして突き出しました。子供は止むをえず、家を出て行きましたが、後に主人はその妻君を呼び、お前は汽車賃をやったかときかれました。いえさきほどのお言葉通り、そうしては悪いと思ひ、何も持たせずにやりましたと答えられた。すると主人は大声で一喝、馬鹿め、とかえって妻君を叱られました。叱る下から可愛や不愆やの思ひが起るのが親の情であります。仏様も、悪のやまぬところが一層あわれであるとお見捨て下さらぬのである。經典に、唯除五逆、誹謗正法、とあるのは釈尊の抑止（おくし）である、それが一層可愛相で、撰取して下さるのが弥陀の本願であります。

今晩の話が説明風になり、一般にお解りよかったと思いますが、實際問題に苦しんでおられる方には物足りなくお感じになったと思いますが、今晩はこれで散会いたします。

近角常音先生御法話

大字三右エ門

（註）昭和二十七年四月、御自坊西源寺法要の御講話

今回どうにか帰ってまいりましたが、七十歳にもなったので、あちらこちら故障を起し、具合が悪いのであります。そういう有様ながら帰ってまいりました、これは有難いことに思わせて頂くのであります。

え：今年とて例年と同じく別に変ったお話も出来ませんが、歎異抄の総結文のお話を申して見ようと思ひます。

聖人御滅後、唯円坊がいろいろ思うてみるに、聖人の御弟子が沢山ありながら、どうも御真意を十分に頂いておらぬ人が多い。それ故いろいろ言ひ紛らかす者が出て来たのであります。これを心配した唯円坊がその異端を歎いてこの歎異抄をお書きになったものであります。

私はこの御聖教を有難いので常々拝読させて頂いておりますが、なかなか奥深いお聖教ゆえどこまでうまくお分りよく話せるか分りませぬが、段々お話しして見ましよう。

この歎異抄は前後二篇で十八条ありますが、始めの九条は、聖人直き／＼のお話をそのままお書きになったものであります。さて聖人はご流罪の終った後は関東にお住みになったのですが、どうしたわけか私はよく分らせて頂けませんぬが、その長年お住みになっておられた関東を捨てて京都へお帰りになられました。当時奥方の惠信尼様は越後においてになり、或意味では一家ちりちりばらばらになつてござる。どういふことで斯く遊ばされたものか学者方にも分りませぬけれども、よくせきのことであられたであろうと思われまします。私共から考えて見ましても、聖人が奥方や御子様方とちりちりに別れてお暮しになったことは説明いたしようもない一通りでないものがありでなかつたのかと拝察いたされるのであります。

聖人は京都においては、かつてのお知合の信者やお弟子や朋輩方が居られたことであろうが、その人々と賑やかにお付き合ひしてござつたかと云うとそうでもない。御伝鈔

にもある通り、跡をとどむるにもうしとて云々とある如く、かくれるようにしておいでになった御様子、仕様のない者がこの南無阿弥陀仏々々々と、これだけでやっておいでになられたものと思われぬのであります。こういう所へ関東の人々が参られてお話を聞かれたものと思いません。

この歎異抄は、唯円房が京都にお伺いして直々お聴聞申して、色々と肝要の節々をお書き下されたものであるが、さて、聖人が京都に帰ってご覧になると、とんでもない異義、信仰上の間違いがまことしやかに言いふらされている、これは随分にながしく思召されたものならん。法然上人の仰せをゆがめて言いふらすのをご覧になって聖人は困ったものだと思召されたことであろうと思ひます。

次にこの歎異抄は、聖人の御入滅後三十年、当時の念佛者の中に信仰上の間違いを唯円房が知るにつけて、それを悲しんで誌されたのであります。で、始めの九条は聖人直々の仰せを書かれ、後の九条は当時のそれらの異義の誤りをただそうために書かれたものであります。この後の九条は今日これからお話申し上げて見ようと思ふ骨子とも申すべきところで、そこをよくお聞きとり願うてみたいと思ふのであります。

五 眞宗の御入滅後三十年

の調子も思うようにまいらず出掛けにくいのであります。彼方、此方とご信心の話がまちまちになって来ております。京都の書店などには仏教の本が種々出版されている。それらは書いた人が、自分はかくかく頂いた。かく思うとこういう具合にその方々一人一人の考えを發表しているのであつて、どうしても一つにならぬ。仏様のお見捨てないのが骨子であるのに、誰も彼もそこに行かねばならぬのだけれども、なかなかそのようにならぬのであります。歎異抄はその所を唯円房が歎いたものでご尤もと思わせて頂きます。私も唯円坊の真似する訳ではありませんが、兄貴のこと思つてそのように思ひます。各々得手に聞いてしまつてとうとう間違つてくるのであります。

「信心の行者自然に腹をもたて悪し様なることをもおかし同朋同侶にもあいて口論をもしては必ず廻心すべしということ、この条断悪修善のこちか云々」(十六条)

吾々自然に腹立て悪し様にふる舞うこともある。誰だとして立腹するのは悪いと考ふる故、同朋同侶に廻心して即ち私が悪かつたと一つ一つ謝る、あやまらぬといかぬと云う。こんなことを決して聖人は仰せられないのに喧嘩しては悪かつたと廻心せねばいかぬという。

然るに聖人は、眞宗では「この条断悪修善の心地か」と

先づ本抄の結文の書き出し、

「右条々はみなもて信心の異なるよりこと起り候るか」

あゝ人は皆が簡単に考ふるが、めいめい勝手に考ふるから間違つてくるのである。私も前々から考えて居りました。これは愚痴話ですけれどもお聞き願ひます。

兄貴は一代皆様に仏様のこと聞いて頂きました。その骨子というものは何かと申しますと、色々云い過ぎるかなれども、仏のお真実(まこと)が有難い、とこれを申していたのであります。煩悶して苦しみとうとう氣狂いのようになつた結果が、最後どうなつたか、世間はその氣狂いの者をかえりみない、可愛相とは云わぬ。ただ仏様お一人は、お前、間違わぬ、間違わぬで間違つてしまつた。それが氣の毒、案ぜられると、かく仏に言われて見て、とうとう兄貴は仏様の御同情だけで安心させて頂いたのであります。それ故兄貴の一代申したことは他には何も無い、その仏様の御同情だけが有難いと、これを一代申して居たのです。兄貴の書物ご覧下さつてもお分りの通りここが骨子として書いているが、世間の人はそこに氣付かぬ。兄貴がどういうことでお話申していたか氣をつけて下さると分るのですけれども、その所がなかなか解つて貰うことが出来ぬのが、これは私が残念に思つて居るのであります。

今回九州の方からお招きうけましたが、私年をとり身体

仰せになつて居る。眞宗の廻心とは、人間一代のうち一ぺんきりであると仰言つてある。

「その廻心とは日頃本願他力眞宗を知らざる人、弥陀の智慧をたまわりて日頃の心にては往生すべからずと思つてもとの心をひきかえて本願をたのみまいらすをこそ廻心とは申しそうらえ云々」(十六条)

話がおかしな事になり十六条の所へとびましたが、ここなどよい実例であります。人間一代のうち眞の廻心は一度しかない。それはどういう事か、日頃本願他力眞宗を知らぬ人、仏様のご真実を氣付かして貰つてない人が、仏の広大な智慧を賜つてみれば、これ一つが有難うございましてとなり、もとの心では往生はかなわぬと思わせられる。即ちそこでもとの心を引きかえて、吾々の一日一日の日頃の心持では往生は出来ぬと思つて、もとの心を引きかえて、本願をたのみまいらすをこそ廻心とは申し候え。

喧嘩口論をして廻心せよと云いたてる信者がある、そんなことであつて見れば吾々きりがないではないか。それでは眞宗は成り立たぬではないか――。

何時も申すお話、あまり直接すぎてどうかと思われますが、この村の庄左エ門さんの奥様のお喜びなされたお話、これは東京でも講話するので、中々味わい深いお話と

思うのであります。私この方をあまり知らなかった。或年、その方のご主人庄左さんが上京して訪ねて見えた。この方は西源寺の門徒ではないので、どういう御用がとお尋ねすると、家内の使いで来ましたと申される。それは何の用事かと重ねておききすると、私の方から発行して皆様に読んで頂いておりました信界建現誌を手にされた。それに弘願真宗という題で兄貴が書いておりました。これは大変もない広大なお言葉で、なかなか深甚の意味のこもるお言葉なのであります。庄左さんの奥さんそれをお読みになつて大変有難かつたので代つて御礼申して来て欲しいと云うので私まいりましたと申される。

私もほとんど庄左さんとは初対面の方であつたがよくお話をされた。その庄左さん曰くに、私も信仰上のこととなると家内に及ばぬ、まいつておりますとのこと。日常生活の上でも家内の様子が變つていたのでまいつていと申される。

これは皆様も私よりよく御存じのことと思ひますが、庄左さんの先の奥さんがお子様二人残して亡くなられ、その後添いとして今の奥さんが来られました。それ故、その奥さんとしてせねばならぬことは二人の子供を立派に育てねばならぬと考えられて、それで一生懸命苦勞なされたらしい。よく世間にある継子いじめなどと云われぬようにと、

く方が、批判している格好であります。(自分はよしで聞いている証拠)

こうした庄左さんの奥様の所へ信界建現誌がとどけられた。その標題に弘願真宗とある。この弘願と云う御言葉の出処は、善導大師の仰せられたものであつて、弘願とは阿彌陀如来の本願が広大なので弘願と申される。何が弘願かと申すに、仏の大慈大悲は善し悪しの差別されない、差別すると狭い。弘願であるから、どんな悪い者でも一点悪いと思召さぬが仏のお心なのであるから、極まりない。

私、兄貴から聞きましたことは、仏様は如何なる者も、たとえ鬼に対してもいかぬと仰せられぬ。

学校の教育に致しましても、悪い事をすればお前いかぬと言ふのであるが、真宗の仏様は一点もいかぬと仰せられぬ。汝、悪いことあるものかと限りない深い広大なお心で向うて下さる。そうでなければ、こちらは悪し悪しで、浮ばして貰えぬ身でないか。

吾々長年仏様のお話聞かせて頂いても仲々頂けぬのである。吾々の本来の性分は何ぞ言われるとかみついてゆく性分である。こんなことでは人に呆れられる、改めねばならぬ、直さねばならぬとなつて、さて直したら直したで、俺が心得て直したとつけ上がるのである。仏はそういう吾々に「それがお前の性分なのだから、それを承知の上に、な

それこそ人知れぬ苦勞をなされたものと思う。ところが、その奥さんを世間はともかく主人にどう思われているか、明けても暮れてもこの事が苦になつて頭について離れない。主人が他所へ下駄の音を立てて出て行くが、段々下駄の音がせぬ様になる、すると、そおつと戻つて来て障子の間からのぞいてはせぬか、何処からか見られていやせぬかと、主人の出入りにつけても気が廻る。奥さんの気持どうしようもなくなくなつてくる。こうなると、ここで誰もが思いつくようにお寺参りを思いつかれた。この心持が切くなれば、最早仏様におすがり申す外ない。

ところが奥さんははじめての寺参りで、最初の間というものは何の事話しておられるやら見当がつかない、チンプンカンブンわからぬ。それでも一年二年三年と聞かせて貰つて居るうちに、どうと分らぬままに有難く思えるようになり、信者らしくなつてきてお慈悲の事も段々わからせて貰えたように思えてくるものであります。

その頃、仏様にお会い申すには、我家のお内仏か、お寺の本堂でお目にかかれると思つておられ、その外では仏様にお目にかかれぬとなつていられた。何時思ひ出してもお見捨てない仏様、何処でもお会い出来るとは思えなかつた。それはそうでしょう、お寺参りの人々の中には、仏様のお慈悲はこうでありますと申すと、仰言る通り／＼と聞

に気の毒とこそ思えとがめ立てするものか」

と、飽くまでも飽くまでもおあきれのない御真心をもつて向うて下される。この様に御真心をお聞かせにあずかつてみて、始めて、私が悪うございましたと仏様の広大な思召しを頂かせて貰うのであります。

さて弘願真宗のところを読みますと、その中に「吾々人間に於いてこれ一つは間違わぬと思つて居ることが、実は間違ひの骨頂である。即ち善い善いと思つて居るそれが一番悪いのだ」と書いて居る。これは兄貴の苦しんだ実験ですから兄貴はこの事、一生懸命なところを申してある。

庄左の奥様はそれを読んで「自分の一番よいと思つて居ることは何か、間違わぬと思つて居る所のもの何か」と調べてみられたら「私は信心頂いて居ると思ひ込んで居ること、信心ということ、仏様を喜ぶこと、これは毛頭悪かるうと思わない。これは有難いことだ、結構な事だ、善いことだ、この私が、私がで、善い善いと突張つてゆくこと、それが一番の間違ひ」と気付いてみられると、これが一番悪いことであつたとなる。もう一度ここを繰返して申して見ますと、本来仏様のお力によつてお救ひ蒙るのであるのに、自分が信心頂いた／＼と喜んで居る、有難いとお念仏申して居ると、何時の間にか自分が自分と得意になつて居た。それが一番恐ろしい事であつたと気付かれた。

これなど考えて思うことでなしに、実際に皆仏様を押込んでいるのである。言葉では浅間しい、悪うございます、申訳ありませんと言いながらも、心持の上では、ともかく自分はよく出来ている、よくしていると、出来てもおらぬのにそう思うて高上りをしている。

これが信仰上のことにつけても思いそこないをしているのでありますが、いわんや日常の事はこればかりである。然るに仏様は何と仰せあるかと言うに「お前出来もせぬの出来る／＼と高上りする、その根性が不慥で捨てられぬとの仰せであるのである。

庄左の奥様ここに気付かれたのであります。それこそ本当に申訳ない事でありました。有難うございましたと、始めて広大な大慈悲、弘願真宗に遇われて深くおよろこびなされたのであります。

今まではお内仏かお寺へ参らねばお会い申せなかつた仏様が、その後は高上りするにつけ、この我慢な者をお見捨てないと思わして頂かれてみれば、台所で焚き物しながら、野に出て歛持ちながらも、何時何処でもお会い申す事の出来る仏様を頂きなされたのであります。今迄はえらい考え損いをしておりましたと御本人が仰言つた。

一昨日来、或人とお話して居りました事ですが、人間と仏様との区別ということでありました。仏様と吾々の違いは

ますと頼みたてまつる、これが真の廻心、唯一辺だけとの仰せになつているのであります。

私も始めて仏様のお心に気付かして頂いた時、明らかにさせて頂いた事は、私それまで兄貴を殊勝な人と考え、私のようなやくざ者はとても近寄れぬ、兄貴は善い性分に生れ、人間が真面目だからあんなに煩悶して苦しみ、それだからお救い蒙ることが出来たのだ。よい性分だから信仰出来たのだと思つていましたそれにくらべて私はやくざな性分で駄目である、とても兄貴の様な立派な信心頂くことは出来ぬと思つていたのであります。思ひかけぬ大慈大悲に遇い奉つた時に気付いて見ますと、この考えはあべこべであつた事を知らされたのであります。兄貴も自分のやくざ、仕様のない性分であつた故に、あのように煩悶し、遂に仏様を喜ばせて貰うたのであつたと分らせて頂いたのであります。世間の人、兄貴のことを申すと嫌がりませうけれども、私は遠慮なく申し上げているのであります。

庄左の奥さんも仏様に遇われるまでは本当のお慈悲というものがおわかりにならなかつた。然るに仏様の本当の智慧をたまわつて見られたら、喜んでい／＼と得意になつている者をお見捨てないお慈悲でましましたかとお氣つきになつて本当のところへ出られたのであります。

吾々は人に親切にする、吾々がどれだけやっても罪惡の人間のすること、すぐこれだけしているとなるのである。吾々は十惡の人間でありながら、自分は仏様をよろこんでいる、これだけ出来ていると自分の事を誇るだけである。仏様はその性分を憐んで下さるので、何処まで行つても境界が違ふということを知らねばならぬと思つるのであります。この話を標準の話みたいにして東京では皆様に申してあります。

話をもしして、十六条のお言葉、廻心してあやまり果てねばいかぬとある。この点キリスト教などで悔い改めというをよく申しているが、罪惡の人間がどれだけ悔い改めたとして限りなしである。清らかになつたように思ふのは誤りで清らかにならぬぎり終るのである。

唯円房はこの条は断惡修善の心地かと誠めてある。人間一期に一度の廻心あるだけである。何度もあるというものでない。庄左の奥さんの話の如く、わしがわしがと得意になつている者を仏様の方が抱きかかえて、その者をお見捨てない広大な慈悲、これ一つで助けて頂くのであります。即ちかくの如きご真実を加えられる故に、それ一つが有難うございます、今までもんでも無い思ひ損い致しておりましたと謝り果てて、それこそ仏を一心に有難うござい

ゲエテの語録

常に現在を離れてはいけない。各々の瞬間は永久というものの中の面影である、したがって無限の価値がある。

同時代の人ばかりを学んだとて何にもならぬ。幾百年経つても少しも価値が落ちずにいるような著作をのこした昔の人を学ぶがよい。

人は他人の口を止めることも防ぐことも出来ない。ただ他人が言うがままに云わしておいて、自分でやるだけのことをするよりほかはない。そうすればしまいは口の方が負けるものだ。

あやまりは絶えず繰り返かえして世に行われている。それだから人は飽くことなく真実を繰り返かえして述べねばならない。

他人から好い忠告を得てそれをを用いる人は、自分で氣がついたのと同じである。

静けさとほゝえみと

— 故池山栄吉先生のこと —

川 畑 愛 義

ちまたには参議院選挙の前哨戦とかで、ラウド・スピーカーから流れる呼びかけがけたたましく聞えてきます。そうでなくても何となく騒々しい今日この頃、街をゆく人々の足どりの性急なものを感じさせられます。

こうしたあわただしさのなかで、却って求められるのが「静けさ」ではないでしょうか。静けさといえ、私にとって思い起されるのはやはり故池山先生です。大谷大学の教授であられた先生は晩年を当時まだほとんど未開であった洛西の蓮華谷の高台に住んでおられました。この先生の面影として今もなお印象的なのは、静かな微笑です。この先生の清らかなほほえみを思い起す時、私の内奥まで何がなし安らぎを感じるのであります。

今は昔になりましたが、夕暮のひとつとき、もの音一つしないお宅の応接室で先生と対坐している時、先生は何も云われず、私も一言も申し上げず、ただ静けさだけが流れ去りたちません。

池山先生は動物を愛されました。動物たちもまた先生に親しんでいたようです。番犬のバアハマンは先生がその頭上に手をかけてやられると、半眼をとし、あだかも禅定に入るかのように息をひそめたと聞きます。それからまた、お宅のカナリヤは、家族中の誰よりも先生を慕い、近づくと喜びの讃歌をさえずったとも聞きました。自分で歌をくちずさむのもいいけれど、小鳥にまでが親愛の歌声を自然に挙げるのも素晴らしいことだと思っております。

× ×
いつか私達は先生のお宅に虫の声をきくために招かれたことがあります。宵暗の草むらにすだく、こほろぎや、かんとんは、天地の静寂にしみ入るようなものがあつたことを今でもおぼえています。このように聞く耳を育てて下さったのも先生のお人柄の余徳の一つかも知れません。

先生はかつて一度も、人々にお説法のようなことはなさいませんでした。しかし、そのつぶやきのようなもの、いやその沈黙こそが何にも増してたくいまれな御教訓であつたし、また語りかけでもありました。

× ×
ってゆきました。そうした折、先生はいかにいわれないほのかな微笑をうかべられる。やがて先生のお唇からお念仏がもれる。それはどんな歌よりも時間と空間にひびく自然なりズムをもっているように感ぜられました。沈黙はなおもつづきます。恐らく先生の心の深層には大自然の摂理とか、あるいは仏陀のお慈悲とかいうようなものがそこはかとなく体感されていたのではないのでしょうか。

× ×
「仏と仏と相念じる」という言葉があるが、私のような門外漢にはよく分りませんが、先生の前に神妙に対坐している私にまでそんな気配が感ぜられてなりませんでした。

× ×
先生が亡くなられてから十数年、先生の遺徳をしたって、いつとはなく、誰からいいたすこともなく、自然に先生のペンネームの一道をとって「一道会」が生れました。

× ×
心をすませば、今日もまたわが先生の声なき声、御称名が聞こえてくるようです。先生がどこかで私を呼んでいて下さる。

× ×
池山先生は、明治六年（一八七三年）東京に誕生。三十三歳の時、岡山の第六高等学校教授、昭和四年大谷大学教授。昭和十三年十一月八日、京都洛西の御自宅で御入寂。

御著書には「絶対他力と体験」、「独訳歎異抄」、「意訳歎異抄」、「信を行く旅人」、「仏と人」などがあります。

× ×
昭和十一年頃からは先生の御健康状態はめだつて悪化していきました。当時私は京大医学部に籍をおき、また研究室中でありましたが、ふとした御縁から先生の御病気の相談にのることになりました。そして後から次第に御治療にも従事するようになりました。

先生の御病氣は慢性気管支炎、肺気腫、動脈硬化症、それに心不全など成人病性のもので、不時の急変が心配されるようになりました。

私は誰にもすすめられなかったのですが、思い切つて居を先生のお宅の近くの衣笠に移すことになりました。そしていつでも先生のお呼びにこたえられるようにしたわけ

おん
さん
スミシ
シ
依り

です。

今から考えると、いかに身軽な身分であったとはいえず、自分の勤務地からかなり遠く離れることはやはりある程度臆つくうなこともあったわけです。エゴ一辺のものを御身辺近くへひき寄せられた先生のこの魅力は何であったのでしょうか。

先生のあのほとんど音にもならない暖かい静けさと、かすかなほほえみ―それはふかい信仰にうらづけされたもの―にほかならなかつたように思われます。お蔭をもって私自身この晩年になってようやく人生の静寂の味わいを知ることができるようです。

行きあたり つき当りせし 業縁の

壁は見えずも 光寂(ひそ)けき

(註) 本稿は、日本生活医学研究所の川畑愛義所長が、同所発行の「生活と医学」誌の六月号にのせられたものです。池山先生の御忌月も近づいてまいりましたので特に転載をお願いしたものであります。人と生れて、終生忘れられぬよき師にめぐり会うことは仲々むづかしいことですがこの上もない喜びであります。所長はまことに恵まれた方と思えます。

念 仏 詩 抄

上 分 別

(和上 禿頭誠師)

和上おおせに

〃はからいなきが

上はからい

分別(ふんべつ) なきが

上分別

凡夫のはからい

役には立たぬ

その手はなして

ナムアミダブツ

いただくまでが

上分別――

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

信後のたしなみ

菅 瀬 芳 英

宗教のことは、一旦信念が出来あがった後はたえずそれを培養して、懈怠なく報謝の行をつとめることが最も大切である。信後の相続においてすこしでも油断すると、折角出来た信念もために崩れて、無宗教者と異ならぬ浅ましいことになるであろうと思う。蓮如上人は「御一代聞書」に「播きたてには信をとることあるべからず」と仰せられたが、信仰の上にはそのまま棄ておいて培養しないというようなことは深くいましめねばなるまいと思う。

近頃のように夏ともなれば、地方地方で各々講師を招いて講習会が流行してきたことは結構であるが、併しそれはほんの一時のことであって、矢張り始終地方々々に住む住職が日夜門徒を導くことを怠らないことが大切であると思う。「久しくして順熟す」ともいうのであるから、僅か一週間位の講習会ばかりに頼らずに、寺の住職は平素が大切である。正信偈に「唯能く常に如来号を称えて」と仰せられるが、唯とはただ余事をまじえず専ら報謝の念仏を相続するということであり、常とは昼夜、春夏秋冬の区別なく不断に称名するということであって、この唯と常とを忘れずししかと心に入れて、信の一念の後には仏恩報謝の大行勤めさせて貰わねばならぬ。云々

木 村 無 相

よくよくおろか

和上お歌に

〃ウソにウソ

三業ともに

すべてウソ

ウソに目鼻の

つきし身なれば――〃

かかる身と

知らでマコトを

これの身に

もとめしわれは

よくよくおろか――

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

如来のおきばり

和上おおせに

〃大量師「随筆」に

この機がきばつて聞いて
間に合うなら

機法一体に成就したまわぬ

機法一体の

ナムアマミダブツ

わたしがきばつた

ソレでない

六字マルマル

如来のおきばり――

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

その まま

和上おおせに

〃ああ

念 山 悟 世

大心海 大心海

ああ

お慈悲 お慈悲

ああ

不思議 不思議

狐 そのまま

狸 そのまま――〃

狐は狐そのまま

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

狸は狸そのまま

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

まこと得たれば

和上お歌に

〃得たくと

おもえる人は

得ざるなり

ただただ大悲を

仰がせたもう

これこそ御廻向の

生きた信心

ナムアマミダブツが

生きた信心――

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

まこと得たれば
得たとおもわず――〃

まこと得たれば

あおぐばかりめし

〃助けんとおぼしめし

たちける本願の

かたじけなさよ――〃

と――

ナムアマミダブツ

ナムアマミダブツ

生きた信心

和上おおせに

〃墮身（おちみ）になりて

大悲の仰がるが

御廻向の生きた信心――〃

墮ち身を墮ち身と

お知らせあつて

人の常の四廿



聖人の常の仰せ

聖人の常持語として伝えられるものは三つある。一つは「我はこれ沙弥教信の定(じょう)なり」と。かつて奈良で仏法の学問を志願せられた教信さんが、感ずるところがあつて賀古川に移り、妻子を帯し、ただ念仏申しながら在家生活のままに往生せられ外に仏法者、後世者の相を示さなかつた徳風を聖人は理想とせられての仰せである。

二つには「信謗共に因となりて同じく往生浄土の縁を成ず」と常に門徒に語られたのである。これも相對差別の境界では思いもおよばぬことで、仏力不思議に転成される妙であるが、聖人はすでに恩師法然上人の信の旅に、それを實地に見聞していられる。高野の明遍僧都が選択集の誤りを糺(ただ)そうとして却つて念仏の大悲に帰順し、或は念仏往生の勧めを批判しようとして催された大原問答の挙句、そこに集つた多くの学僧が、かえつてその情をひるがえすなど沢山の例があつた。そればかりでなく親鸞聖人の

花田正夫



九十年のお生涯にも色々と経験なされたことであらう。元來弥陀仏の絶対のおまことは、よいから助ける、わるいから捨てるではない、善ければよいで毒に苦しみ、悪ければわるいで毒せられる煩惱の我々をみそなわして、善悪の凡夫を憐愍して下さるのである。そしりながらも、ほめながらも暖炉に手をかざすと温かさが自然に伝わるように信謗であれ、順逆であれ、共に縁となつて眞実なるものは浸到する。

三つには有名な歎異抄にあるもので、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業を持ちける身にありけるを、たすけんと申し召したちける本願のかたじけなきよ」である。聖人の御晩年まで師事した唯円房がお聞きして心に深く刻まれた常の御述懐である。

常の仰せ

常の言葉というものは、仰言る人には無意識の場合が多い。たとえれば、食事をしたり、歩行するとき、手や足が無意識に動くのと同じである。だから常にお側に居る者だけが聞きとることが出来る。しかも生前は、又言つていられる、今度も同じことをという風に軽く聞きすぎし易いけれど、亡くなられてのちに、聞く者の心に深く刻まれてくるものである。それというのも何時でも、何処でも、誰にでもくりかえして仰言る言葉は、単なる言葉でなく、その人のいのちそのもの、目に見えぬからである。

一指頭の禪を提唱した俱胝和尚は、何時も誰にも、指一本立てて答へとされた。或時和尚の留守中に何か問題をもつて尋ねてきた人があつた。そこでいつも給仕していた弟子が、指一本立てて和尚の真似をした。和尚が或日それを知つて、弟子を呼び、難問を提出されると、弟子は指を立てて答えた。すかさず和尚が隠し持った双物でその指を切りつけると、弟子は血を流しながら驚いて逃げようとする。和尚は待て…と呼び、すうと指を立てられた。そこで弟子ははじめて其玄意をさとつた、とある。和尚の指はそのまゝ和尚の全人格である、弟子のそれは真似事にすぎなかつた借りものであつた。この和尚の臨終に一指を立て生涯つかつてもつかつてもつかい尽くせなかつた、と述懐さ

れたと聞くが聖人の常持語もそうした趣きであらう。

聖人すでに寂滅の煙と化し、慈声も無常の風に障えられているけれど、実語金言と申すべき常の仰せがこざれている。そこで聖人の形や声だけに接するのでなしに、常の仰せに心をひそめて、そこに顕現して下さる眞実の聖人にお会いしたいものである。今回は主に歎異抄にある常持語について述べよう。

親鸞一人がためなりけり

私は始めて歎異抄のこの仰せを拜して、一番に不審に思つたのは、如來は十方三世のあらゆる衆生を一子の如く憐愍され、一人のこらず救い遂げずば仏とはならないとお誓願をおこされたのに、聖人は、親鸞一人がためと受けとめていられるが納得出来なかつた。そこで池山栄吉先生にそのことをおたずねした。

先生はその時、御自作の都々逸調の二首、

衆生可愛や 生死の海に おのが罪から浮き沈み

久遠このかた子故の廻向 わたし一人をかた思いと仏を示された。そして、先生がわたし一人をかた思いと仏の大悲を直感させられたのは、大手術をうけて入院中の御次男の枕元であつた。平素のん気な父さんで、これでも親と云えるのかと怪しんでいられたが、病人が水を云う前に水を用意している自分に驚いて、親と子は二にして一、

一つにして二と知らされた。更に五人の子供があるが、十把ひとからげに可愛いというのでなく、一人一人に直結して、一人一人がかけがえがないのだ。如来は我々をかけたえのないものとして憐愍して下さっているのも、その通りである、聖人は一子の如く憐れんで下さる大悲心をそのままに渴仰されて一人がためと仰言っているのである。夏は暑く、冬は寒い、暑いから暑い、寒いから寒いと云うのと同じである、と話して下さった。

これはいやと云えぬお味わいで、一人がためとは、仏心を聖人が独専されたのではなく、一人一人が仏心に直結された信味である。その仰せで、あらゆる人々が夫々に一人がためと信受させて頂ける扉も開かれるのである。

以上は親の立場、即ち仏心から信嘗されたものであるが、私はここで衆生の側からかえりみたいと思う。その手がかりは、歎異抄十三条の聖人の次のお言葉である。

「さるべき業縁のもよおせば、いかなるふるまいもすべし、とこそ聖人はおおせそうらいしに云々」

内に煩惱具足の身とて、それに相応した縁にふれると、腹も立つし、愚痴も出る、どんな業さらしをするか解ったものではない。自分は決してあんな馬鹿な真似はせぬとか、なんぼなんでもあんな悪事は断じてやらぬなどと云え

対差別の心しかない私共は自分を立派にせねば仏心の蓮華は見られまいと思ひ、悪くは捨てられると思ひこんでいて、すこし調子がよいとこれで安心、それが崩れると矢張り駄目かとなって何時までも安心の時はない。和讃に

衆生有碍のさとりにて 無碍の仏智を疑えば
曾婆羅頻陀羅地獄にて 多劫衆苦にせずむなり

と悲涙の中にお誡め下さるところである。如来の作願は煩惱に縛られて苦悩はてることのない私共のためにやむにやまれぬ悲心からおこされている。自分で自分の始末がつかず、誰からも見捨てられる悪人を成仏せしめんと願っている。そこにこの仏心を仰ぐ場所は綺麗などころではない、縁にふれては恩人をも仇とにくむ鬼心、或は相手を蛇の様にしつこくろう心、そうした心の片輪の身の上に願力を仰ぐのである。紀州の徳本上人は

愚痴阿弥陀、貪欲阿弥陀、瞋恚阿弥陀、
阿弥陀仏々 阿弥陀仏々
と讃仰し続けられた。伝教大師の御歌には
鷲の山 高嶺にのみと思ひしに

わが立つ柵に 有明の月
とあり、西行法師は

人も見ぬよしなき山の末だにも
澄むらん月の影をこそ思え
と詠じていられる。木に火がついて、木と離れず、やがて木を焼きつくすように、臨終の一念まで続く煩惱の林も

るものではない、内にあらゆる因をもつ身とて、自分の保証は出来ない、足元あぶなしあぶなしである。

この聖人のお言葉に照らされて、自分で作った独りよがりの殻が砕かれると、一切の人々の業報の姿の中に、自分も同じ業縁にあえば同様のことをする奴と、他の一切の相の中に自己を見出されるのである。聖人が「さればそくばの業を持ちける身」と仰言るのは、身にもつ業因が、それ相応の縁に催されては造り出す無数の罪業のことである。そこでは、一切人の罪業が聖人の御心の中におさまり、又聖人が一切人の中に同座して下さるのである。かくて聖人お一人の救いが、そのまま一切人の救われ得る可能性へあかしとなり、もし一人でも仏の大悲からまれる人があれば、聖人も救いの御手からまれるのである。一人即一人、一切人即一人の妙消息がそこに知らされる。

このことは、小慈小悲さえない身には、何とも云えぬたのもしさ、ありがたさである。私を救い遂げて下さる仏力は、有縁、無縁のあらゆる人々をもやがて救い遂げて下さることを信じうるからである。

さればそくばくの業を

次に、一人がためと信味された場所は「そくばくの業を持ちける身」の上である。維摩経に「高原の陸地に蓮華を生ぜず、湿地の淤泥（おでい）に蓮華を生ず」とある。相

大悲の火に完全燃焼されて、必ず成仏せしめて下さるのである。

かえりみるのに、親鸞聖人は、二十九歳の時、終生の恩師、法然上人のお導きで信眼が開かれたけれど、御晩年の愚劣悲歎述懐和讃にあるように、浄土真宗に帰していられるけれど、微塵も御自身がよくなったとは仰言らず、いよいよ仏光に照らし出される、虚仮不実、蛇蝎奸詐の身をそのまま慚愧されて、如来の願船をたのみ、弥陀廻向の御名をたたえられている。山高うして谷深きを知られての浄土への信の旅であった。

金言 聚墨生

聖人の常持語と善導大師の金言とが全く一致していることを唯円大徳は誌しているが一味の信海に立たされる方々の時と所を超えた心の通いである。金は鏑が出ないようにならぬ心から出た言葉は、何時までも古くならない新しさをもち、又耳にきき、目にふれると、空しくなることはない。聖徳太子は「経というは常なり、前聖後賢、是非すべからず」と釈していられ「何れの世、何れの人かこの法を尊ばざらん」と仰言ったのも、この金言への満腔の信頼であり、讃仰である。「実というは必ずもののみとなる」と聖人が言われたのも思ひ併せられる。

あとがき

三伏の夏となりました。暑中御見舞申上げます。

この八月は、近角常音先生の御忌月とて、御郷里の西源寺での御法話を大字様の筆録から頂きました。古稀を迎えられた先生がお身体の違和の中を帰られて、お遺言をされる思召しからの御法語でありました。筆写させて頂きながら胸にあついてもを覚えます。

常編先生の談話会の抄録は、一方交通でなしに、一人一人に応病与薬して下さったもので、次回にこの二回目を続けさせて頂きます。

川畑愛義さんのは、池山先生のお人柄をおもい浮かべての御原稿であります。これは、川畑さんが、日本生活医学研究所の所長さんで、同所発行の「生活と医学」の六月号に発表されたもの一つであります。その外「皮膚温度の不思議」という研究所のレポートもあり、又、読者の質問箱の欄で所長自身が答えていられます。

木村無相さんは、用心に用心されながら、重病入の見舞やら、法友との信交の旅を体力の許す限り続けていられます。

最近、蓮如上人の御文、四帖目四道の「そ

れ秋も去り春も去りて年月を送ること昨日も過ぎ今日も過ぐ、いつの間にかは年老のつもりらんとも覚えず知らざりき。そのうちには花鳥風月の遊びにも交りつらん、また歡樂苦痛の悲喜にも遇いはんべりつらんなれども、今にそれと思ひ出すこととは一つもなし。ただ徒らに明し、徒に暮して老の白髪となり果てぬる身の有様こそ悲しけれ云々、今においては生死出離の一道ならでは願うかたとは一つもなくまた二つもなし。ここに未来悪世の我等ごときの衆生をたやすく助けたまう阿弥陀如来の本願のましますと聞けば、まことに頼もしく有難くも思ひはんべるなり云々」とある一文に私の姿を云いあてられ、生死出離の一道より外に願うかたの絶無であるとうなづかされております。もしこの道なければ、更にそこに導き入れて下さる本願ましますと、しみじみ味わわれることでもあります。いのちは法の宝と申しますが、私も七十四が近くなつて、平素軽く眼をとおしていた御文が、勿体なく思えるこの頃であります。

八御案内

○一道会例会。毎月、第一、二、三、日曜午後一時半。

南区駈上町二の八八、花田宅。

市バス、新郊通り一丁目下車。

地下鉄、新端橋終点下車。

名鉄呼続下車。

○教西寺法話会。毎月二十四日、午前午後昭和区小桜町二丁目四番地。

市バス、北山、又は御器所通り下車。

地下鉄、御器所通り下車。

定価 半年 七〇〇円 (送共)
一年 一四〇〇円 (送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人 花田 正夫

愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷 坂部 光雄

名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所 慈光社

振替口座 名古屋 一〇四七〇番
郵便番号 四五七